

マストドンは規模の経済を競う Webを変えるのか

楠 正憲 (国際大学 Glocom)

Twitter クローン、マストドンが急速に拡大し話題となっている。Twitter と根本的に異なるのは、誰もがレンタルサーバなどにごく簡単にインスタンスを設置し自由に運用できる点である。しかも、インスタンス同士がグローバルに連携可能で、ユーザは連携したインターネット上のどのインスタンスのユーザもフォローできる。インスタンス間の連携は、ミニブログ間の相互運用を目指して開発された OStatus プロトコルを用いて実現している。

日本だけでユーザが数十万人に達し、世界のインスタンスを見ても Pixiv の運営する pawoo.net や、大学院生の運営する mstdn.jp、mstdn.jp を運営していた大学院生が就職したドワンゴの friends.nico が、軒並み 10 万人以上のユーザを擁して上位に連ねるなど、日本で急激にユーザを増やしている。オープンソースで自由に改変できるので、既存サービスの付加機能としてインスタンスを立てて同じ ID で簡単に使えるようにできる。またライセンスとして Affero GPL を採用していることから、各社でどのようなカスタマイズを行ったかユーザが簡単に確認できる。

本稿執筆時点で世界最大規模のインスタンスである Pixiv が運用する pawoo.net では、Pixiv がイラスト投稿サイトであるためイラストの投稿が多いが、投稿されているイラストが国によっては児童ポルノに該当し、海外のインスタンスから切断される事案が発生した。従来 Twitter などの SNS は世界中の法令に適合するためにこうした投稿を認めてこなかったが、マストドンのようにインスタンス単位で異なるポリシーで運用でき、相互で緩やかに連携するモデルであれば、インスタンス単位で国ごとに異なる法令を遵守することが可能となる。

一方で簡単にインスタンスを立ち上げることができることから規制が難しく、無法地帯となることも

懸念されている。たとえば出会いを目的としたインスタンスが多数立ち上げられているが、出会い系サイト規制法に基づく記載が見られない。これはなにもマストドンに限った話ではなく Web サイト全般にいえる話ではあるが、マストドンは高度な操作性を備えた SNS を容易に構築でき、大規模化も容易であることから、悪用がより深刻になる可能性もある。

マストドンの構築には Docker コンテナを利用できるほか、さくらインターネットをはじめとして構築テンプレートをあらかじめスクリプトで用意する事業者も出てきたことから、インスタンスを立てること自体はブログなどの Web サイトを構築するのと同程度に容易である。だがインスタンス単位でどう集客するか、集客できたとしてサーバの容量をどう確保するかなど、適切なマーケティング・運用を持続するのは、個人が容易にできることではない。mstdn.jp を構築した大学院生が数週間のうちに何度もデータを消失し、さくらインターネットからホスティングの支援を受け、その後ドワンゴに就職したことから分かるように、万単位のユーザを抱えて本格的な SNS サービスとして運営するためには、スケーリングや安定運用のための技術やノウハウが必要となる。

ブログのように自分から情報を発信するサービスであれば、純粋に情報発信のためのネットワーク帯域やシステムリソースを提供すれば十分だ。しかし、マストドンではユーザがほかのインスタンスに対してリモートフォローを行った場合にほかのインスタンスとの通信も発生するため、数百人しかユーザがいない場合でも相応のストレージが必要となる。インスタンスの全投稿を閲覧できるローカルタイムラインや、連携先も含めて全投稿を投稿できる連合タイムライン機能を持つことが Twitter と比べてユニー

クな点で、興味深いユーザを見つける上で参考になるものの、大量のサーバ資源を消費する上、ユーザ数が増えるとタイムラインが速く流れすぎてしまって実用的ではない。少人数で閉じた SNS を運用する分には相応のリソースで運用できるが、ユーザ登録をしないとタイムラインを閲覧できない仕様となっているため、広く情報発信のツールとして利用するには敷居が高い。

なぜこの時期にマストドンのようなボトムアップの SNS が話題となったのだろうか。1 つに大規模 SNS のユーザが増えすぎて、好ましからざる閲覧者に気を遣わざるを得ない「Twitter 疲れ」から逃れ、アーリーアダプタ中心の狭い世界へと回帰したいとするユーザの心理にマッチしたことが考えられる。普及した SNS から新興 SNS への流出は、これまでも GREE, mixi から Twitter, Facebook, さらには Instagram などへの移動に見られた。Twitter ユーザがマストドンに移動すれば、知り合いに自分のアカウントがバレてしまう「垢バレ」のリスクが低く、炎上のリスクが小さく、これまでの Twitter 上でのしごらみから逃れることができる。

また近年 Twitter の経営危機がささやかれ、タイムラインへの広告の挿入が増えたり、投稿のピックアップが恣意的であることに辟易している古参ユーザの間では、昔の Twitter のようにシンプルな機能を求めて、あるいは Twitter がサービスを止めた場合の避難先として、Twitter に代わるミニブログを探す動きがあった。10 年前に Twitter に飛びついたアーリーアダプタが一斉にマストドンへと飛びついた様子を見て懐かしさを感じると同時に、また流行りに乗ろうと追随する心理が働いたのかもしれない。さらに遡ってパソコン通信の草の根 BBS を振り返るユーザもいる。

では今後マストドンは Twitter や Facebook の牙城となっているタイムライン型の SNS に風穴を開けることになるのだろうか？ 残念ながら現時点で日本国内のユーザ数は 100 万人に満たず、マストドンが Twitter や Facebook と同様に社会に定着するかどうかは分からない。過去の例としては OpenPNE のように mixi クローンとして地域 SNS や組織内 SNS として使われたものの、スケーラビリティに制限があって普及が頭打ちしたオープンソースの

SNS もあった。オープンソースのコンテンツ管理システムとして成功したブログの MovableType や Wordpress と比べると、利用者の収容により多くのサーバリソースを消費する点が気になる。この点は ITMedia のようにユーザ登録を受け付けず発信専用のインスタンスとすることで負荷を抑える運用事例も出始めている。

マストドンが流行るかどうかとは別として、企業のオウンドメディアや Web サービスと連携したコミュニティとして自前の SNS を運営する敷居をマストドンが下げた。マストドンの成功が刺激となって、再びオープンソースの SNS 開発が活性化したり、既存の CMS や Web アプリケーションが OStatus などのプロトコルに対応し、相互運用を実現するかもしれない。もっとユーザが増えれば SNS の寡占化によってタイムラインを通じたユーザへのリーチに広告費を要する現状に一石を投じることに繋がる可能性もある。一方ですでに Twitter でフォロワー資産を持つインフルエンサーやブランドにとって、マストドンにユーザを引き継げるわけではない。まずは流行りに乗りつつ、それぞれの SNS やマストドンインスタンスの特徴に合わせた使い分けに悩むことになる。

分散システムとして成長してきたはずの Web が Big Giant を中心とした集権的なトポロジへと変質した集中化の流れに対してマストドンは一石を投じる可能性がある。一方で利用者の増加によって個々のインスタンスのスケラビリティだけでなく、社会との折り合いやコミュニティ運営やガバナンス、インスタンス間連携のアーキテクチャの面でも試練に直面することになるだろう。しかし mstdn.jp のユーザが幾度となくデータが消えても登録し直して、運営する大学院生を応援しながらその目覚ましい成長を共に応援したように、これからマストドンの直面する試練を共に楽しみ、乗り越えることこそ、このタイミングでマストドンに参加する何よりの醍醐味かもしれない。

(2017 年 5 月 16 日受付)

楠 正憲 (正会員) ■ kusunoki@glocom.ac.jp

国際大学 Glocom 客員研究員。インターネット総合研究所、マイクロソフトを経て 2012 年ヤフー入社。現在 CISO-Board としてセキュリティ対策、CDO-Board としてデータ戦略の立案推進に従事。内閣官房 番号制度推進管理補佐官、政府 CIO 補佐官、内閣府 CIO 補佐官として番号制度を支える情報システムの構築に携わる。一般社団法人 OpenID Foundation Japan 代表理事、ISO/TC 307 国内委員会委員長。